

保育におけるケアと保育者のゆらぎ

— 研究者を志すものとして —

横井 紘子

はじめに

日本保育学会が大妻女子大学で開催された。大変綺麗なキャンパスで、その設備を少し羨ましく思いつつ、目当てのシンポジウムの会場を目指した。今回の企画シンポジウムⅠ・Ⅱ・Ⅲには「傍ら」という言葉が入っている。私は企画シンポジウムⅡ

「こどもの傍らに近づくために—実践研究の方法—」を聞かせていただき、保育実践の場をフィールドとし、そこに介入して研究していくことは何を意味するのか、そこでは何が生起しているのか等について、パネリストの先生方のお話を聞いた。シンポジウムの後、自分で考えをめぐらせている間に、尾崎新先生と大場幸夫先生の対談である「ケア・ワー

クとは何か―現場でゆらぐことの意味―」が始まった。そのままお二人の先生方のお話に聞き入り、あつという間に時間は過ぎてしまったが、対談が終わった後に、自分の考えがストンとまとまっていく感覚を覚えた。

本稿では保育学会において、企画シンポジウムⅡ「こどもの傍らに近づくために―実践研究の方法―」と対談「ケア・ワークとは何か―現場でゆらぐことの意味―」を聞いた経験から、私が感じたことを記しておきたいと思う。

子どもの「傍ら」にあるために

最初に、私自身がどのように保育現場と関わっているのかを簡単に紹介させていただく。大学院生である私は、週に一回、都内の幼稚園にフィールドワークに入らせていただいている。また、午後は預かり保育の援助スタッフとしてボランティアを行って

る。幼稚園における私の立場は、しばしば諭えられるような、「壁」や「透明人間」などではない（なろうと思っても、なれるものではないと思う）。できるだけ客観的に子どもの姿を見ようと努める時もあるが、求められた時には子どもや保育者と積極的に関りながらフィールドワークを行っている。その幼稚園に関らせていただくようになって三年目になるのだが、自分がフィールドにおいてどのような位置にいるのか不安に感じることもよくある。また、研究者を志すものとして、子どもの側にいる大人として、常に子どものありのままの姿を捉えようと模索しているのであるが、今回の学会のキーワードでもある子どもの「傍ら」に私はいることができているのかも不安である。そもそも、大人として子どもの「傍ら」にあるとはどういう事態なのであろうか。まだ私には、この「傍ら」という言葉が何を意味するものなのか、保育学会が終わった今でも自分

の中で咀嚼できていない。

しかし、学会において先生方のお話を聞く中で、子どもの「傍ら」としてあるためには「ゆらぐこと」が必要な事項ではないかと感じた。「事項」というよりも、「傍ら」にあるための「基盤」「根っこ」を形成するために「ゆらぐこと」が必要である、と言った方が表現は適切かもしれない。「ゆらぎ」とは、尾崎先生のお話によれば、「葛藤、不安、無力さ、わからなさ、問いと出会うことによって引き起こされる感情や体験」のことである。この「ゆらぎ」がなければ、効率化を求めた結果、人をシステムや制度の中にあてはめ、一人の人間として人と人として感じることもできない、非常に虚しい、恐ろしい事態に陥ってしまうであろう。

しかし、「ゆらいでばかりではよくない」とも尾崎先生はお話しされていた。また、ケアは、『受け入れる』のではなく、『受け止める』こと』である

とも先生はおっしゃっていた。では、「受け入れる」ことと、「受け止める」こと、この違いは何であろうか。

私自身まだ両者の違いを明確に示すことができない。しかし、最も違うと感じることは、「受け止める」場合には、「受け止める側」と「受け止められる側」に、はっきりとした差異―他者性―が認められるということである。このことは、「受け止める側」が「受け止められる側」を、単に他人として區別しているということではない。そうではなく、保育ならば、子ども（「受け止められる側」）の独自性



や、子どもがある個人として、かけがえのない人格をもっていることを意識し、尊重することであり、それは同時に、保育者自身（「受け止める側」）も自分がそうだった人間だと感じることである。この差異があるからこそ、子どもを「受け止める」ことができ、「傍ら」にいろことができるのではないだろうか。

そして、この差異を失ってしまうと子どもを「受け入れる」ことになり、「受け入れる」というと、聞こえはいいかもしれないが、これは、言いかえれば、子どもを自分（保育者）に引き込んでしまう事態を表しているように思われる。つまり、子どもを自分の枠組みでしか捉えられなくなってしまう事態、子どもを一人の独自の人間として感じられなくなってしまう事態である。そして、「ゆらいでばかり」の状態も、一見逆のことのように思われるが、子どもに侵食されてしまう状態、保育者が一人の独

自な存在であるという意識を失ってしまう状態を示しており、差異を感じられなくなっている点では同様のことであるように思われる。よって、「ゆらいでばかり」の状態から脱し、自分自身を独自の存在として尊重でき、更に相手を「受け止める」ことが可能になるために、また、相手を「受け止め続ける」ために、「ゆらぐこと」が必要になってくると言えるのではないか。

尾崎先生は「ゆらいで、ゆらいで、その結果としてゆらがない信念がある」と指摘されており、「ゆらぐこと」によって、「土台」「根っこ」ができるというイメージを抱かれているようであった。また、それは「液体から固体への変化」ということではなかった。これは「ゆらぐこと」が積み重ねられた結果の「信念」ができあがったからといって、途端に「ゆらぐこと」が必要なくなったり、できなくなったりするわけではないことを示しているのだ

はないか。むしろ、その後に「ゆらぐこと」がなければ、「根っこ」は腐ってしまうのであろうし、「受け止める」ことは出来なくなってしまうであろう。尾崎先生はベテランの保育者の姿として、「ゆらぐことができる」、「ゆらがなない信念をもっている」、「若い人に『ゆらいでいいよ』と言える」という三つの事項を示しておられた。

シンポジウムⅡにおいても、「ゆらぎ」という言葉こそ明確には使われていなかったが、同じような経験が先生方のお話の中にいくつか示されていたように思う。石黒広昭先生は「子どもと大人の協働問題生成過程としてのドラマプレイ」として、学生が子どもと遊びを作り上げていく事例を紹介された。その中で石黒先生は学生側が「準備しすぎない」ことが重要であると指摘されていた。さらに、学生が子どもと共に遊びを生成していくためには、子どもを「一般化・客観化」するのではなく、子どもと関

る中で、「違う視点を得ることによって自分（学生）の思いを揺さぶる機会」が重要ではないか、ともおっしゃっていた。石黒先生が提供なさった事例での学生たちも、「ゆらぐこと」を体験し、時には、自分自身の無力感を感じながらも、子どもを「受け止めて」いったのではないだろうか。先生の「準備しすぎない」という指摘は、「ゆらぐこと」ができる隙間を、学生にも子どもにも残しておくことが必要である、という指摘でもあるように感じられた。

研究者として「ゆらぐこと」

「ゆらぐこと」が実践者である保育者において重要な事柄であることは、ほんやりと理解できたのだが、現場に赴き、子どもと対峙している研究者として「ゆらぐこと」とはどのような事態であり、何を意味するのであろうか。

研究者として現場に赴く場合には、少なからず、

何か「データ」となるものを取りにいこうとする。また、子どもにまつわる様々な学問を背景とした理論があり、研究する上ではこれらの理論に立脚する場合が多い。研究者自身、それらの理論や自分自身の経験から子どもや保育に対して何かしらの考えを抱いており、それに基づいた問題意識や仮説をもって現場に關つていくであろう。

しかし、たとえ研究者であっても、現場において実際の子どものありのままの姿を捉えようと真摯に努めるならば、これらの理論的枠組みや経験則に基づいた既存の枠組みのみでは子どもの理解に至ることとは不可能であり、必然的に「ゆらぐこと」になるのではないか。真の意味で子どもの「傍ら」にあり、子どもと共にあるならば、少なくとも子どもと向き合っている間においては、研究者の枠組みは一旦横に置いておかなければならないし、必然的にそういういった状態になっているはずではなからうか。既

存の枠組みに意味がないということは決してなく、それがなければ「ゆらいでばかり」の状態になってしまう。しかし、子どもと向き合いながら、既存の枠組みや理論に目の前の子どもをあてはめていくことは、子どもの理解においても、同時に研究においても、何も生み出さないように感じる。「人をシステムや制度の中にあてはめる」ことが、ケア・保育の危機としてお話の中にもあげられていたが、研究においては、「子どもを枠組みや理論にあてはめる」ことが、ある種の危機として認識されるべきではないだろうか。

以上、学会で考えたことを簡単にまとめてみたものの、私自身、未だに「ゆらいでばかり」である。未知の事柄に圧倒され、わずかに生えた「根っこ」が切り離されて飛んでいってしまわないように、研究生生活を過ごしていきたいと思う。

(お茶の水女子大学)